学 位 論 文 要 約

論文題目　デュルケムの道徳教育論―〈道徳の科学〉と〈人間性の宗教〉―

申 請 者　　水谷友香

本論文は、エミール・デュルケム Émile Durkheim(1858-1917)の道徳教育論を彼の目指す〈道徳の科学 science de la morale〉と〈人間性の宗教 religion de l'humanité〉の二側面から捉えなおし、今日にも通じる意義を明らかにすることを目的としている。科学と宗教という二つの視点は、デュルケム道徳教育論における〈意志の自律性 l'autonomie de la volonté〉の概念を解き明かしていく過程で、道徳教育の方法と理念をめぐる議論として導かれたものである。

本論では 4 章にわたり、デュルケム道徳教育論の特質について検討していく。

まず、第 1 章では教育をめぐるデュルケムの議論を『教育と社会学』と『フランスにおける教育学的進化』から検討し、二つのまなざしとして整理した。二つのまなざしとは、教育の本質を論じる普遍的な視点、第三共和政期フランスに望まれる教育を論じる限定的な視点である。本論文では特に、後者の視点に立って、デュルケムが新たな教育に何を求めていたのかを探究し、多様な人間性の理解と自律的な個人の育成が重視されたことを示した。このような切り分けにより、デュルケムの教育思想に対する両極端な評価を総合的に理解することができる。社会実在論者として教育の機能を分析している言説と、道徳的個人主義者として新たな教育の理念を扱っている言説の両面からデュルケムを捉えなおせば、対立する概念の調停者としての姿が浮かび上がってくるのである。

次に、第 2 章では『道徳教育論』が論じられた背景と道徳性の三要素の意義について、『社会分業論』『自殺論』「個人主義と知識人」を通して考察してきた。道徳性の三要素とは、道徳生活の基礎をなす〈規律の精神〉、〈社会集団への愛着〉、〈意志の自律性〉の三つを指し、これらがデュルケムの思索においてどのように成立したのかを検討した。『道徳教育論』以前の著作を検討して明らかになったのは、デュルケムが道徳に社会の紐帯としての役割を期待していたことである。紐帯としての道徳は、二つの力により個人を結びつける。一つは規制力であり、個人を拘束し一定の場面で一定の行動を課す働きをもつ。もう一つは統合力であり、望ましいものとして個人を惹きつける。この二つの力はそれぞれ、〈規律の精神〉

と〈社会集団への愛着〉として説明されており、あらゆる道徳に見られる一般的特質として理解できる。一方で、〈意志の自律性〉は性格が異なる。この要素は、宗教に拠らない世俗的道徳に特有の要素として、新たに追加されているからである。『道徳教育論』は世俗的道徳をいかにして教えるかを課題としているので、本論文では〈意志の自律性〉こそデュルケム道徳教育論において最も注目すべき点だと考える。

続いて、第 3 章では〈意志の自律性〉とその教育について、『道徳教育論』と『プラグマティズムと社会学』を検討しながら、科学による知性の育成という観点から考察した。〈意志の自律性〉に関するデュルケムの講義録には、該当箇所の欠落という研究上の困難があるが、関連する論述を用いて、その構想の解明に取り組んだ。デュルケムは自律性の源泉を科学に求め、道徳を科学の対象として研究する必要を訴えていた。そこで彼が提示したのが〈道徳の科学〉の創設である。これは、道徳の現状や存在意義を解き明かす学問であり、実証科学を通して得られた知識により、合理的な判断が可能となるとされた。この点においてデュルケムにおける自律性には主知主義的な要素が強く、〈意志の自律性〉を「道徳を理解する知性」と言い換えている。ただし、科学に対するデュルケムの立場は単純ではない。彼にとって科学とは合理主義と同義であったが、当時の合理主義に満足せず、これを革新せねばならないと考えていたからである。デュルケムにとって科学とは、客観的な判断基準を得る術であると同時に、必ずしも万能ではない道具であった。科学が未完成で不十分であるゆえに、それよって得られる真理の多様性を認め、個人の限界と集合的に知を形成する必要性が説かれる。こうした柔軟な態度は、単純合理主義にも神秘主義にも陥らない健全な精神を養う。科学は知識の提供とともに、望ましい知的態度の育成の点で、教育に役に立つ。こうして〈道徳の科学〉は道徳教育論の方法論的基礎を形づくっているのである。

最後に、第 4 章では、〈意志の自律性〉の根幹に位置する〈人間性の宗教〉という概念について検討してきた。デュルケムが道徳性の要素として〈意志の自律性〉を提示した背景には、個人の尊重が道徳の原理となっているという考えがある。この立場がどのようにつくられていったのかを、『社会分業論』『自殺論』「個人主義と知識人」を通し、時系列に沿って確認した。デュルケムは 1890 年代後半頃、ドレフュス事件をきっかけに、個人を擁護する立場を明確にし始めている。彼は、利己主義的個人主義と道徳的個人主義を区別し、すべての人に共通する要素としての人間性一般の尊重を現代道徳の根本に据えた。このとき、〈人間性の宗教〉や人格の崇拝といった用語が使用された。同時期の『社会学講義』では、道徳的個人主義の視点から、個人を解放する存在としての国家について論じ、個人の自由が拡大

していく未来を待ち望んでいる。このように〈人間性の宗教〉という概念は、近代社会の理念として示されているのだが、では、なぜ世俗的道徳の時代に、宗教的用語をもってこれを表現したのだろうか。本論文ではこの点について、先の『社会学講義』や『宗教生活の原初形態』を手がかりに考察を進め、二つの目的を明らかにした。一方は、集合的所産としての権威や超越性を強調するため、他方は熱望の対象として集合的感情を喚起するためである。個人の尊重という道徳の原理を生きた現実にするためには、〈人間性の宗教〉という表現でなくてはならなかった。〈道徳の科学〉の指針となる〈人間性の宗教〉は、道徳教育論の理念として位置付けられる。

デュルケム道徳教育論は、方法として〈道徳の科学〉を、理念として〈人間性の宗教〉を有している。その理論において、科学と宗教は対立するものではない。両者を包摂したデュルケムの思索を検討していくと、彼は、個人と社会、自由と権威、科学と宗教の一方を選ぶのではなく、それらが絡み合うものとして世界を捉えようとしていたことがわかる。本論文ではこれをデュルケム理論の特質と理解してきた。

結論では、それまでの検討を踏まえ、デュルケム道徳教育論の今日的意義について考察を深めた。デュルケムは、社会により道徳は異なるとする道徳的相対主義の立場をとっている。そこに普遍的意義は見出せるのか、という問いに対し、『道徳教育論』や『社会学講義』で示された人間的理想という概念について、検討を行った。人間的理想とはすべての人に適用される普遍的道徳を指す。デュルケムは道徳教育を人類の福祉を志向するものとして捉え、これを実践する機関として国家を挙げている。デュルケム道徳教育論には普遍的道徳が含まれていないわけではなく、人間的理想のもとに、各国家が道徳実践を行うことが想定されている。各社会の道徳の相対性はこの理想が異なるやり方で実践された結果と見なされるのである。

デュルケムが論じた道徳には、相対的なものと普遍的なもの、両方が認められる。〈道徳の科学〉による観察と分析により、その相対性が明らかになるとともに、〈人間性の宗教〉として結実した普遍性が確認されるのである。

以上のような考察を通し、本論文では、デュルケム道徳教育論は〈道徳の科学〉と〈人間性の宗教〉の両面を理解することで本質を理解できると明らかにしてきた。この視点に立てば、デュルケム道徳教育論に普遍的意義を見出すことができるだろう。